

■ 書 評 ■

運動障害診療マニュアル 不随意運動のみかた

H. H. Fernandez, R. L. Rodriguez, F. M. Skidmore,
M. S. Okun ●原著
服部信孝 ●監訳
大山彦光, 下 泰司, 梅村 淳 ●訳

京都大学大学院教授・臨床神経学 高橋良輔

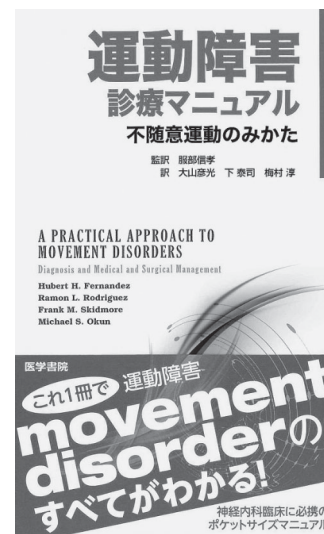
Movement Disorder の和訳は運動障害 (疾患) あるいは運動異常 (症) で、運動が過多になり不随意運動を呈する疾患群 (例: 舞蹈病)、逆に運動が過少になる疾患群 (例: パーキンソン病)、そして場合によっては運動が不器用になる疾患群 (例: 脊髄小脳変性症) の総称である。運動障害は神経内科疾患の中でも最も謎めき興味の尽きない疾患群であり、研究が重ねられてきた。今日では、その病態生理や遺伝学的背景について数多くの知見が得られ、それらを基に新しい薬物治療法が生まれ、手術療法やリハビリテーションなど非薬物療法の進歩も著しい。しかし運動障害の診断・治療は必ずしも容易ではなく、例えば特異な不随意運動をどのように記載するかは、熟練した専門家の腕の見せどころ、といった面がある。初学者の中には苦手意識を持つ人も多いかもしれない。

このたび訳出された『運動障害診療マニュアル』は、運動障害は複雑と考えて敬遠しがちな向きの人には朗報となる実践的な手引書である。著者のうち、Hubert Fernandez 氏は著名なパーキンソン病の専門家であり、国際パーキンソン病・運動障害疾患学会 (International MDS)

では Website editor として大変魅力的なサイトを構築して、学会で表彰されたこともある。また Michael Okun 氏は DBS の世界的権威で、2012 年の日本神経学会で招待講演をされたことも記憶に新しい。この 2 名に Rodriguez 氏、Skidmore 氏の 2 名の若手研究者が加わって作成された本書は、極めて斬新、かつ実践的なアプローチで運動障害の診断と治療のポイントを教えてくれる。

前半の「運動障害疾患の内科的アプローチ」では、ミオクローヌスを「ピクつく (“jerky”) 患者」、パーキンソニズムを「ヒキずる (“shuffling”) 患者」とその特徴を端的にとらえて運動障害を定義している点だが、新鮮な印象を受け、取り付きやすい。内容も鑑別診断や治療法をわかりやすい図表を使って、また箇条書きで解説してくれるので、短時間で重要事項が頭に入りやすい。

また、後半の「運動障害疾患の外科的アプローチ」では DBS の適応疾患、ターゲット、手技からプログラミングまで、要領よく解説されている。さらに「運動障害疾患の包括的アプローチ」では言語療法、作業・理学療法、栄養療法が取り上げられ、個々の疾患への対応がわかりやすく書かれている。これまで、運



動障害の外科療法、包括的療法についてこれだけ具体的、明解で、しかもコンパクトに書かれているものは読んだことがなく、大変得るところが多かった。

わが国での本格的な Movement Disorder Clinic の設立に尽力されている順天堂大学脳神経内科・服部信孝教授の監訳のもと、大山彦光氏、下 泰司氏、梅村 淳氏の 3 名の若手・中堅の脳神経内科医・脳神経外科医の共訳による訳文は、正確で、かつ表現がこなれていて、読みやすい。熱心な読者なら 2~3 日で通読できるだろう。サイズも白衣のポケットに入る重さと大きさで、マニュアルの名にふさわしい。研修医から専門医に至る医師はもちろん、メディカルスタッフにも手元において役立ててほしい、ベッドサイドで頼りになる虎の巻である。運動障害の患者を扱うすべての医療関係者に強く推薦する。

B 6 変型 頁 288 2013 年

定価: 本体 3,800 円 + 税

[ISBN978-4-260-01762-6]

医学書院刊